

保育園における危機管理について④

事故が発生したら・・・

事故発生



周囲の状況の把握と全身の観察



協力者を求める

- ・ 大量出血などの手当
- ・ 心肺蘇生法の必要性
- ・ 連絡・搬送



止血法、心肺蘇生法などの実施



救急隊 → 医療機関

総務省が発行している

「救急車を上手に使いましょう」

～救急車必要なのはどんなとき?～

<http://bit.ly/pQlXiU>



携帯版QRコード



以下「救急車を上手に使いましょう」から引用・・・・・・・・

ためらわず救急車を呼んでほしい症状：小児(15歳未満)

こんな症状がみられたら、ためらわずに119番に連絡してください！

重大な病気やけがの可能性あります。

- 頭・・・・・・・・●頭を痛がって、けいれんがある。●頭を強くぶつけて、出血がとまらない、意識がない、けいれんがある。
- 顔・・・・・・・・●くちびるの色が紫色で、呼吸が弱い。
- 胸・・・・・・・・●激しい咳やゼーゼーして呼吸が苦しく、顔色が悪い。
- おなか・・・・・・・・●激しい下痢や嘔吐で水分が取れず食欲がなく意識がはっきりしない。
●激しいおなかの痛みで苦しがり、嘔吐が止まらない。
●ウンチに血がまじった。
- 手足・・・・・・・・●手足が硬直している。
- 意識の障害・・・・・・・・●意識がない(返事がない)又はおかしい(もうろうとしている)
- けいれん・・・・・・・・●けいれんがとまらない。●けいれんが止まっても、意識がもどらない。
- 飲み込み・・・・・・・・●変なものを飲み込んで、意識がない。
- じんましん・・・・・・・・●虫に刺されて、全身にじんましんが出て、顔色が悪くなった。
- やけど・・・・・・・・●痛みのひどいやけど。●広範囲のやけど。
- 事故・・・・・・・・●交通事故にあった。(強い衝撃を受けた)●水におぼれている。●高所から転落。
- 生れて3カ月未満の乳児●乳児の様子がおかしい。

◎その他、いつもと違う場合、様子がおかしい場合。



大量出血などの手当て・・・止血法

子どもの血液量は体重の約 10 分の 1 と少なく、少ない量でもショックを起こします。新生児では 30ml の出血でも命にかかわることがあります。同じ出血量でも短時間に出血した場合は危険です。ショックというのは急激に全身の血液循環不全が起こり、臓器や組織に十分な血液が行きわたらなくなって引き起こされる状態をいいます。とにかく止血を急いでショックを回避しなければなりません。

心肺蘇生法の必要性・・・心肺蘇生法

救急車が 119 番通報を受けて現場に到着するまでの時間は、全国平均で約 6 分です。もし、呼吸も心臓も止まった子どもに何もしないで救急車が来るのを待っていたらその子の助かる確率は、わずか 5% 以下です。仮に救急隊が生命を救えたとしても、その子の脳細胞は、重大なダメージを受けて、脳細胞が死んだ状態になり呼吸や脈拍が再開しても意識が戻らない状態になってしまいます。そこで、保育士等が救急車が到着するまでの空白の 6 分間の間に、応急手当をする必要があるのです。

応急手当などに関しては次のサイトを参考にして下さい。

<http://www.fdn119.jp/manual/index.html>

連絡・搬送・・・救急車の呼び方

- ① 「119」をダイヤルする。
- ② 「火事ですか、救急ですか」とたずねるので、「救急です。」と答える。
- ③ 場所を伝える。
園の名前、住所、電話番号(携帯電話の場合はその旨伝える。)、電話した本人の名前、目標物を伝える。
- ④ 「どのような状態ですか。」と聞かれたら、
「いつ」「どこで」「だれが」「どのようにして」「どうなったか」を説明し、けが人などの人数を正確に伝える。
- ⑤ 電話で指定した目標物まで、必ず誰かが出迎えて救急車を誘導する。
- ⑥ 救急車が到着したら、救急隊員に次のことを伝える。
 - ・ 到着までの子どもの状態。
 - ・ 到着までに実施した応急処置。
 - ・ 119 番受付員から電話で指示された応急手当があればその内容。
 - ・ 子どもの病歴。その病名、かかりつけ医など。通院中なら受診病院。
- ⑦ 保育者が救急車に同乗する。

法的責任

心肺蘇生法などの応急手当は、子どもの命を救うためのものです。従って保育者がためらわずに勇気を持って実施しなければなりません。その場合、法的な責任を問われると心配になるかもしれませんが、しかし、これについて直接に定めた法律はありません。市民が善意で実施した応急手当は悪意などが無い限り、その結果の責任を問われたことは一度もありません。

感染対策

応急手当を実施するにつき、感染防止上で問題になるのは肝炎と HIV / AIDS(ヒト免疫不全ウイルス/エイズ)があります。これらは血液を介して感染しますので、応急手当を行うにあたっては、血液に直接触れないようにしなければなりません。